マルコとマタイの論争

加藤　　潔

序．研究の課題

新約聖書に収録されている四つの福音書の内，マタイ，マルコ，ルカの三つの福音書は全体の構成枠，叙述観点がかなり共通し，また重複記事が多いために「共観福音書」Synoptic Gospels，synoptische Evangelienと呼ばれるが，近年，この類似性の根拠をめぐる，いわゆる「共観福音書問題」が新約聖書研究の中でも大きな比重を占めるに至った。(1) そして，後に概略を述べるように，福音書成立における資料問題に関しての諸説が出されるのであるが，同時に，イエスの歴史性はこれらの共観福音書の中の共通部分を抽出することによって描き得るのではないかという期待も高まった。(2) しかし，これは実際に作業を進めてみると非常に困難であることが判明した。各福音書間の相違は簡単につじつまを合わせられるようなものではない。ところが，幸いなことに，福音書の記事の原資料を追求する作業が進むにつれて，各資料の伝承者とそれらの資料を編集した者がいかなる考えを持つのか，またいかなる場において伝承し編集したのかという点を明らかにせざるをえない状況に到達した。その結果，共観福音書の共通部分にイエスの歴史性を求めるのではなく，むしろ相違点に着目し，そこに特に福音書編集者の独自の立場と主張を見出すことによって，その中にイエスの歴史性，およびイエスの存在をめぐるできごとの歴史性を発見するという方法が登場したのである。(3) そこでは当然のことながら福音書編集者間のイエス理解の相違点が明らかになるが，むしろその相違点の中にこそ各福音書が伝えたい重要事項があると考えられるし，紀元１世紀のキリスト教誕生の時点でイエス理解をめぐるいかなる問題と論争があったかも明らかになると思われる。

そこで，本稿では福音書成立に関しての資料問題に触れながら共観福音書各書の編集意図を探り，その上で特にマルコとマタイの共通記事の中からいくつかをあげて比較検討することによって，紀元１世紀のキリスト教がいかにイエスを語り，また自らを形成しようとしたのかを考える。この作業は，今日新約聖書をいかに読むか，そしてそこから現代の社会と人間に対するいかなる指針を読み取るのかという課題と深く結びつくし，ひいてはキリスト教そのものが今後の時代の中でどのような意義と使命をもつのかということについての答を導き出す手がかりを示すにちがいない。

Ⅰ．共観福音書の成立事情と問題点

１．資料問題

共観福音書の共通性と相違についての研究は18世紀の終わり頃から始まるがその概略を辿れば次のようになる。

(1) 原福音書説

これは，現在の福音書に先立ってアラム語の福音書がありこれをもとに三つのギリシャ語訳が訳されたが，その翻訳の相違によって相違部分をもつ共観福音書が生まれたという説である。アイヒホルン（J.G.Eichhorn）はギリシャ語訳は一つで，それを資料として共観福音書が生まれたとする。この説は共通部分の説明にはなるが，相違部分が相当の分量を占めることについての説明にはならない。

(2) 断　片　説

これはシュライエルマッヘル（F.E.D.Schleiermacher）が提唱したもので，イエスに関する記録の断片が作られ，その後その断片がたとえ話，奇跡物語などのテーマによって集められ，福音書記者はそれらをもとにして各福音書を書いたという説である。断片という点に着目したことはその後の研究に道を開いたが，共観福音書の構成の共通性については説得力に欠ける。

(3) 伝 承 説

これはヘルダー（J.G.Herder）やギーゼラー（J.C.L.Gieseler）が提唱したもので，断片のかわりにイエスに関する伝承の言葉がまず存在し，それが語り継がれる過程で固定化し，それをもとに共観福音書が生まれたとする説である。これは断片としての文書資料にかわって自由な変化の可能性がある口伝という点に着目したことが評価されるが，共観福音書の個々の箇所の正確な言葉の一致点や全体構成の共通性の説明について説得力に欠ける。

(4) 2資料説と4資料説

現在の共観福音書の編集以前にイエスの言葉，行動に関する断片資料，口伝が存在することを予想したこれまでの研究を参考としながら，断片，口伝，文書化の段階を総合的に組合せ，かつマルコ福音書がまず書かれ，それがマタイとルカの共通資料になったことを立証したのが2資料説と4資料説である。2であるか4であるかはマタイとルカの独自資料を口伝段階のものとするか，文書化された資料とするかの相違であって，考え方としては共通のものである。

この説によれば共観福音書の資料は次のようになる。

① 口伝（oral tradition）

イエスの死後，イエスの言葉，行動がさまざまな場所で，さまざまな人々によって語り伝えられた。[4] それはやがて伝承するグループの状況（Sitz im Leben），その伝承を担う必要性などとの関係から「格言，予言，たとえなどの言葉」，「対話，論争」，「奇跡，受難などの物語」といった様式をもつようになった。

② Q資料（Quele）

終末の近いことを信じるグループによって集められたイエスの言葉資料。多分このグループはイエスの言葉を反復しそれを実践することによって終末に備えようとしていたのであろう。

③ マルコ福音書（Mark）

イエスの活動開始から死までを時間を追って記録した最初の福音書である。著作年代はユダヤ戦争によるエルサレム崩壊（70年）の前後と考えられる。[5] マルコの特色については後に述べる。

④　M資料（Matthew）

マタイ福音書著者が独自に使用できた資料。マタイ福音書はこれと，マルコ，Q資料をもとに書かれた。資料の部分削除，編集者の加筆は編集の際に自由に行われた。

⑤　L資料（Luke）

ルカ福音書著者が独自に使用できた資料。ルカ福音書はこれと，マルコ，Q資料をもとに書かれた。削除，加筆についてはマタイと同じ。

以上の資料問題は論述を進めるための確認にすぎないが，問題は，これらの資料の成立と各福音書の編集がいかなる意図のもとになされたかという点である。

2．共観福音書成立時代のキリスト教の状況と問題点

現代の多くの読者は福音書をキリスト教という既成宗教の教典，宣教活動の教科書と見るし，共観福音書相互に矛盾や主張の違いはないと考えるだろうが，しかし，確かに各福音書はそれぞれの宣教課題を達成するためにその福音書を書いたとは言えるものの，特にマルコとマタイの間にはイエス理解をめぐる激しい論争が込められていることを指摘しなければならない。私的見解を交えて述べるならば，その歴史的事情は次のとおりである。

(1)　イエスの生涯の概略

たとえ概略といえどもイエスの生涯を描くということは至難の業であるが，ここではマルコ福音書に沿って要点のみを記しておきたい。

イエスはユダヤの国の被差別地域でもあったガリラヤにおいて農民として生まれた。彼の父は早くに死別したか，あるいは初めからいなかった。彼はローマ帝国とその傀儡であるヘロデ王家，およびこれらに組する政治的，経済的支配階層の下にあって搾取と差別に苦しむ民衆と共に生きた。彼は，いくばくかの奇跡治療師の能力があると自覚する者であったらしいが，それを用いて教団を設立してその教祖になる考えは持たなかった。彼は，自らも被差別の立場にある者として生き，その日常は農民としての生活環境の中にあり，彼を取り巻

く者も同様であった。彼の行動はユダヤ教の教理が被差別階層を「罪人」と断罪することへの抵抗であり，そこに被差別者こそ「罪人」ではなく神の創造によって生まれ，生きる者，すなわち「神の子」であるという主張が掲げられた。彼はいくつかの祈りによる治癒行為をしながら農村を歩き，被差別者が人間として生きる世界，すなわち「罪人」が「神の子」となって生きる「神の国」を語った。(6) 彼の行動と主張は天下を揺るがすほどのものとはならなかったが，それが搾取の構造を補完する宗教的差別の論理を否定する運動として広まることを恐れたユダヤ教当局者から危険視され，彼はローマの民衆支配のみせしめとなって反ローマ活動をする政治犯として告訴され，政治犯のみに行なわれる十字架刑によって殺された。イエスには幾人かの行動を共にする者がいたが，わずかの女たちを除けば，彼らはイエスの逮捕と同時に逃亡してしまった。これがイエスの生涯である。

(2) 紀元1世紀のキリスト教の状況

イエスの時代は，被支配者の側から見れば，70年のユダヤ戦争に象徴されるように，ローマの圧政に対して，強固な民族主義を基盤とする怒りが沸騰点に達する時であり，(7) また一方では神秘主義的終末待望信仰が都市文明批判を伴ってかなりの勢力をもっている時代でもあった。(8) そこで，イエスの活動と十字架事件は大きく分けて四つの運動となってその展開を見るのである。

第1はイエスの生前の民衆運動を継承しようとするものであり，マルコはこの流れの中から生まれたと考えたい。第2は神秘主義的終末待望論の中にイエスの教説を生かそうとするものであり，Q資料はここから生まれたと言えよう。この運動は終末が予想以上に遅いために長くは続かず，特に70年のエルサレム崩壊によってひとまず姿を消すこととなる。第3はルカ福音書などが志向する世界宗教への道の追求である。そして第4が，イエスによって選民イスラエルの主流が形成されたとするエルサレム教会の立場であり，マタイ福音書はこの立場に立つものと思われる。

以上の分類はいささか説明不足であるが，ここでマタイ福音書とルカ福音書の編集形態とその意図について述べて補足としたい。

(3) マタイ福音書の特質

マタイ福音書は旧約聖書との関連の中でイエスを語るが，マタイによればイエスは第2のモーセであり，そのイエスによって今こそ真正の選民イスラエルが出現し，エルサレム教会こそがその担い手であると主張する。このことはマタイ福音書の構成に現れている。

マタイ福音書の構成は，その本論を図示すれば次のようになる。

区分	物語資料	言葉資料	結語
1	3：1 ～ 4：25	5：1 ～ 7：27	7：28，9
2	8：1 ～ 9：35	9：36 ～ 10：42	11：1
3	11：2 ～ 12：50	13：1 ～ 13：52	13：53
4	13：54 ～ 17：21	17：22 ～ 18：35	19：1
5	19：2 ～ 22：46	23：1 ～ 25：46	26：1

マタイ福音書1～2章は全体の序論であって，そこに描かれるイエスは第2のモーセである。第1のモーセがエジプト王パロに命を狙われたようにイエスもユダヤ王ヘロデに命を狙われ，モーセがエジプトから脱出しカナンの地を選民イスラエルの地としたように，イエスもエジプトに行きそこから「イスラエルの地」に帰る。かくしてイエスは真正な選民イスラエルの歴史を再構築する活動を開始する。3章から26章1節までの本論は5部に分かれるが，それはモーセが著したと信じられていた「モーセ五書」を想起させるための区分である。各部は物語資料と言葉資料とから成り，「これらの言葉を語ってから○○に行った，○○をした」などの定まった結語で終る。因みに，5～7章はモーセの律法授与に匹敵するものと考えられるのだろう。26章2節から28章は十字架と復活の物語でありマルコの記事をマタイが採用したのだろうが，マルコ以前にすでに受難物語は一定の形式を整えており，1世紀の教会が最も大切なものとして伝承していた。マタイはこの記事の最後にイエスが山に登って弟子たちに活動の継承・発展を命じるという形を描き，これもまた申命記末尾のモーセの死と選民イスラエル形成の命令の場面を想起させる。

もちろん，構成の類似だけでマタイの主張が終るわけではない。マタイの主張と論法について特に重要と思われる点をあげておきたい。

① マタイによればイエスの言葉と行動は旧約聖書の成就である。そのことはマタイ福音書に旧約聖書の引用が非常に多く，しかも「このことは旧約聖書の○○の言葉が成就するためである」という説明句がいたるところに登場することによってもわかる。(9) 旧約聖書の中心をなす選民イスラエルの伝統と使命はユダヤ教がこれを継承すると考えられ，事実この時代のユダヤ教はその自覚のもとに活動を続けていた。そのユダヤ教に対してマタイはイエスを中心とする弟子集団とその活動の継承者であるエルサレム教会こそが真正の選民イスラエルであると主張する。そのためにはイエスにおいてこそ旧約聖書が成就したということを繰り返し述べるのである。

② 上記のことはマタイ福音書にパリサイ派批判が圧倒的に多いことからも証明される。確かにイエスはパリサイ派との間に対立関係を生んだであろう。しかし，マルコ福音書と比較してマタイ福音書は執拗にパリサイ派批判をイエスに語らせている。そして，キリスト者はパリサイ派よりも律法を厳格に守ることを使命とする。(10)

③ マタイ福音書は12弟子の権威を強調する。イエスの弟子が12人であったことは，その史実性はともかく，マルコ福音書も認めるところであり，イエスが何らかの意味で12弟子とイスラエル12部族を関連づけて考えていたのかもしれないが，マタイ福音書においては12弟子，特にその筆頭とされるペテロの権威をことさらに擁護するし，ペテロはイエスと一緒に水の上を歩いたり，イエスから教会の土台石になれと任命されたりする。後に分析するようにこれらペテロに対することさらな権威づけはマタイ福音書独自のものであって，ここにもユダヤ教に対するエルサレム教会の選民イスラエル正統派の自己主張が見られる。

以上，マタイ福音書の特長を3点のみあげたが，これらのことからマタイ福音書はユダヤ教に対して自らを真正な選民イスラエルであると主張することに最大の関心をもっていることが判明するし，そのような立場からイエスを語る

グループが明らかに存在していたことが分かる。そして，それはイエスの弟ヤコブを指導者とするエルサレム教会であったことは確かであると思われる。

(4) ルカ福音書の特質

ルカは明確な歴史観をもって自らの福音書を書いた。ルカの考えによれば神の救いの業はイスラエルに始まり，イエスの活動によって決定的展開がなされ，やがて全世界に広まるものと考えられている。ルカはルカ福音書とその続編である使徒行伝を書くにあたって，イエスの活動と教会の活動の「場所」を厳密に設定することによってこのことを描こうとする。時間の進展が場所の移動によって象徴的に示されるという手法である。

まず，ルカによればまずイエスの活動が次の3期に分けられる。

① ガリラヤ伝道の期間。この期間にはイエスはガリラヤ以外の地には行かない。

② エルサレムへの旅行。イエスの旅はエルサレムに向かうものであって，マルコ6章45節から8章26節に記されるツロ，シドンへの旅行は削除される。

③ エルサレム。イエスはここで死ぬ。復活はエルサレムで起こり，ガリラヤでの顕現はない。

続く使徒行伝では，エルサレムにおける復活と昇天の後，教会はエルサレムで始まり，ついにローマに到達してその歩みを完結する。つまり，イエスの活動とその継承である教会の活動は，ガリラヤ→エルサレム→ローマという明確に意識された場所において進められる。そして，この3段階の場所の設定はルカの歴史観に基づき，その歴史の3段階と対応する。そのことを図式的にまとめれば次のようになる。

イスラエルの時 ――― ベツレヘムからガリラヤへ ――― ルカ福音書
イエスの時 ――― ガリラヤ・旅行・エルサレム ――― ルカ福音書
教会の時 ――― エルサレムからローマへ ――― 使徒行伝

ルカ福音書はこのような歴史観に立って書かれているが，そのためにはイエスの旅行記事を大胆に削除したり，そのほかさまざまな手法を凝らしたりする。ここではその詳細に立ち入ることをしないが，少なくとも，紀元1世紀におい

てすでにローマ帝国をキリスト教宣教の対象として明確に自覚していたグループがあったということが言える。

(5) 中間的まとめ

イエスから始まったキリスト教は，自ら「キリスト教」という宗教の形成を自覚する者，しない者を含めて，紀元1世紀においてすでにいくつもの立場に分かれていた。そして，当然のことながらその相互の間にはイエス理解，イエスについての語り方，また自らの生き方に関する激しい対立と論争があった。従って，この対立と論争の実態を明らかにすることに主眼を置いて共観福音書の比較検討がなされるならば，そのことによってイエスをめぐるさまざまの立場，意見が明らかになると共に，イエスの事実をより歴史的に，人間的にとらえることができると思われる。また，その作業は今日のキリスト教のあり方についても重要な指針を提供するに違いない。

Ⅱ．マルコとマタイ

1．両者の立場と論争点

ここではマルコ福音書とマタイ福音書の両者の対立点，論争点，及びその理由を考えたい。

(1) エルサレム教会

イエスの死後，イエスを伝える運動はいくつかのグループによって担われたが，その中心をなすのはエルサレムを拠点とする運動，すなわちエルサレム教会であるとするのが一般的である。確かにこれを無視して1世紀のキリスト教を語ることはできない。しかし，このエルサレム教会の実態とその神学，およびその評価，そしてエルサレム教会が他の運動といかなる関係にあったかについては護教的立場からの見解がほとんどであって，そこには資料の取り扱い方や分析の態度に関して必ずしも正確とは言えないものがある。

まず資料の扱い方について考えると，従来エルサレム教会の実態は使徒行伝を第1資料として描かれた。しかし，使徒行伝はルカの神学に基づいてルカ福

音書の続編として書かれたものであり，著作年代も80年以降である。70年のエルサレム崩壊は，その後もエルサレムに司教がいたとは言うものの，エルサレム教会に対して決定的な激変を与えているはずであり，また財産共有制や職制，他の地域やグループに与えた影響などについてどこまで正確であるかはわからない。そこですでに50〜60年代に書かれたパウロ書簡が使徒行伝よりも正確な資料として採用されることになる。パウロは部分的ではあるがエルサレム教会の信仰告白や宣教の内容を伝えている。それは，イエスの死が贖罪の死であること，イエスはダビデの家系に属するメシアであり復活によって神の子とされたこと，イエスの死と復活は旧約聖書に書かれている神の救済計画の成就であることなどである。またパウロはエルサレム教会とのやりとりについても述べているので，その点からも実態を推測できる。(11)

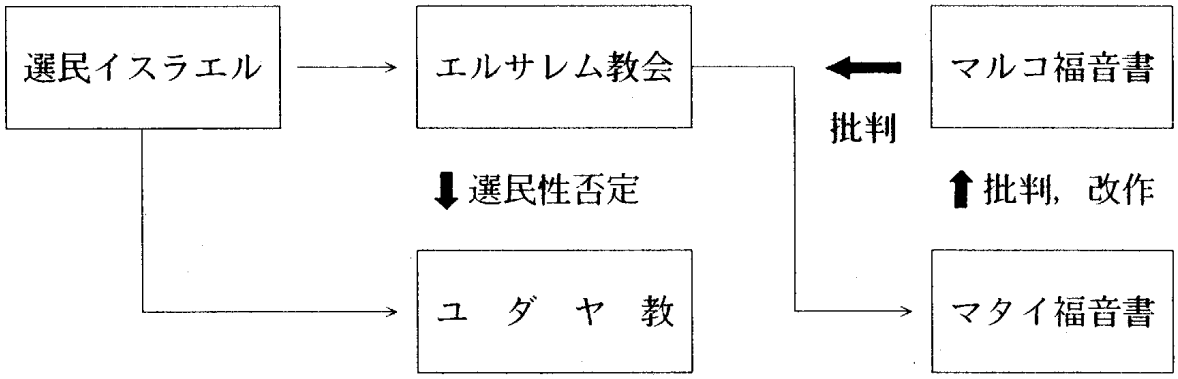
このように，パウロ書簡と使徒行伝とによってエルサレム教会の実態とその神学が明らかにされるのだが，それが明らかになればなるほどいくつかの疑問，ないし問題点が浮かびあがる。その一つはパウロおよび使徒行伝が一貫して描いているエルサレム教会をすべての教会の中心とする見方，すなわちエルサレム中心主義は果たして事実であるのかという点であり，もう一つはパウロやエルサレム教会のイエス理解が絶対のものとして全ての教会の賛同を得ていたのかという点である。パウロはイエスの生涯の中でもガリラヤでの活動については全く関心を示さず，もっぱら十字架と復活に関心を集中し，(12) しかも旧約聖書の律法の論理によってその意味を語るのだが，それが1世紀の教会の全てであったのかどうか，という点である。パウロ書簡と使徒行伝とから考えるとすれば大体そのような印象を持たざるを得ないのだが，それ以外のイエス像やイエス理解はあったはずである。このように考える時，ここにマルコ福音書の存在が浮かび上がる。

確かに，パウロやエルサレム教会の神学はエルサレムを中心として存在していたし，相当の影響力を発揮していたであろう。しかし，イエス運動の継承者はそれ以外にもいたはずである。その人々はイエスのガリラヤでの活動を軽視し，十字架と復活をもっぱら旧約聖書の律法論から解釈することに批判的であ

り，生前のイエスの生き方そのものを語り続けたいと考える人々であった。私見によればその人々によってマルコ福音書は書かれた。そうだとすれば，エルサレム教会を含む1世紀の教会の事情を明らかにするためにもマルコ福音書が重要な資料となる。現在の新約聖書が福音書，使徒行伝，書簡という順序になっているために，福音書はイエスの事実を語り，使徒行伝はその後の教会の歩みを語り，書簡，ことにパウロはそれらの意義について理論的に集大成したものだという印象を与えやすいが，時間的順序から言えばまずエルサレム教会があり，その影響と指導のもとにパウロがあり，その後十数年を経てマルコ福音書が書かれ，さらに十数年たってからマタイ福音書，ルカ福音書，使徒行伝が書かれたということになる。そして，もしもイエス理解やイエス運動の継承の仕方についての論争，相互批判があったとすれば，新約聖書の各書の執筆年代順にその論争の跡を辿ることが正しい資料の扱い方であると思われる。そして，そのような方法で新約聖書を扱うことから，初めてイエスの総合的，複眼的，科学的分析と評価が生まれ，その作業を通してこそ今日のキリスト教のより正しいあり方とイエスの伝え方が生まれるはずである。

(2) マルコ福音書とマタイ福音書

以上のことを前提としてエルサレム教会とマルコ，マタイ両福音書の関係を考えてみたい。あえて図示すれば次のようになる。



イエスの死後，イエスの弟ヤコブを中心とするエルサレム教会は当時選民イスラエルの正統的継承者を自認するユダヤ教に対して，自らこそが選民イスラエルの正しい継承者であると考え，その論拠としてイエスのメシア性，神性を主張し，パリサイ派に勝る律法遵守を目指した。当然のことながらユダヤ教からの迫害を受けた。パウロはこのエルサレム教会からイエスのことを教えられ，旧約聖書の律法論に基づくイエス理解を理論化していったが，やがてギリシャ，ローマへの宣教を使命とするに及んで律法遵守については柔軟な立場を表明するに至った。しかし，エルサレム教会が選民性の主張に力点を置き生前のイエスの生き方や律法主義の差別性を無視することに対して批判的な人々はいた。特にガリラヤのイエスの活動そのものに支配，差別，抑圧からの解放を見た人々はエルサレム教会の神学に対してこれを批判すべく，民衆の中に生きたイエスそのものを描こうとする作品，マルコ福音書を書いた。それはすでにエルサレム教会においてイエスの宣教の中心的ことがらとされていた「受難物語」や「12弟子の存在」などを採用しつつも，しかし，その受難に至るイエスの歩みを民衆の立場から描くことによって受難物語に対する新しい解釈を提示しようとするものであった。特に，エルサレム教会が自らの選民性の根拠としてイスラエル12部族の継承者としての12弟子の権威を強調することに対しては徹底的にそれを否定する論陣を張った。また，すでに流布されていた12弟子こそが復活の目撃者でありそれ故に教会支配の権威をもつという論理に対しては，自らの福音書の終局において，復活のイエスは弟子には現れず，ガリラヤへ行けばイエスに会えるというメッセージのみを女たちに伝え，エルサレム教会で権威の象徴とされていた12弟子は十字架の場面から逃亡したままの者として描いたのである。

これに対して，マタイ福音書はエルサレム教会の神学に立ち，マルコ福音書のエルサレム教会批判をことごとく覆すことに力点をおいた。しかし，すでにマルコ福音書はイエスの生涯を時間を追って叙述するという形式をとった最初の福音書として広く読まれ，その価値は否定できないものであったので，マルコ福音書とほぼ同じ形式をとりつつ，一つ一つの物語を巧妙に書き改めるとい

う方法をとった。マルコ福音書の12弟子批判はそれをやわらげるか，あるいは意味を変えるという方法を用い，またユダヤ教に対しては徹底的にこれを批判する言葉をイエスに語らせた。律法遵守については強く主張した。また教会組織を強めるためには信者の除名も辞さず，来世の恩恵と審判の厳格さを強調した。これらのことのためにマタイはQ資料をかなり用いた。そして前述したようにこれらの内容をイエスは第2のモーセであるという考えに立つ構成の中でまとめたのである。

2．テキストの分析

以上のことをいくつかのテキストの分析を通して立証したい。

(1) ピリポ・カイザリアにおけるペテロの告白

〈マルコ8：27〜30〉	〈マタイ16：13〜20〉
27さて，イエスは弟子たちとピリポ・カイザリアの村々へ出かけられたが，その途中で，弟子たちに尋ねて言われた,「人々はわたしをだれと言っているか」。28彼らは答えて言った，「バプテスマのヨハネだと，言っています。また，エリヤだと言い，また，預言者のひとりだと言っている者もあります」。29そこでイエスは彼らに尋ねられた，「それでは，あなたがたはわたしをだれと言うか」。ペテロが答えて言った，「あなたこそキリストです」。30するとイエス	13イエスがピリポ・カイザリアの地方に行かれたとき，弟子たちに尋ねて言われた，「人々は人の子をだれと言っているか」。14彼らは言った「ある人々はバプテスマのヨハネだと言っています。しかしほかの人たちは，エリヤだと言い，またエレミヤあるいは預言者のひとりだと言っている者もあります」。15そこでイエスは彼らに言われた，「それでは，あなたがたはわたしをだれと言うか」。16シモン・ペテロが答えて言った，「あなたこそ，生ける神の子キリストです」。17するとイエスは彼にむかって言われた，「バルヨナ・シモン，あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたの

は，自分のことをだれにも言ってはいけないと，彼らを戒められた。	は血肉ではなく，天にいますわたしの父である。18そこで，わたしもあなたに言う，あなたはペテロである。そして，わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない。わたしは，あなたに天国の鍵を授けよう。そして，あなたが地上でつなぐことは天でもつながれ，あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」。20そのとき，イエスは，自分がキリストであることをだれにも言ってはいけないと，弟子たちを戒められた。

この記事はマルコ福音書，マタイ福音書に共通するものであるが，マタイ福音書の文章の中で傍線をつけた部分はマルコ福音書にはなくマタイ福音書にのみ記されているものである。そして，この部分はルカ福音書にはないから，マタイのみが保持していたM資料からとったものか，あるいはマタイの編集上の加筆であり，いずれにしてもマタイがマルコに対して修正したいか，反論したいかの意図によるマタイの自己主張と見て間違いはない。そこで，この加筆の意図を考えるためにはマルコの記事それ自体の意味，特に1世紀の教会にとっての意味を推察してみなければならない。

「共観福音書問題」が提起されない時代にはマタイの加筆部分も当然イエスの真正な言葉とされていたから，この記事をめぐる解釈の中心は，イエスがその上に教会を建てると言った土台はペテロ個人であるか，ペテロの告白であるかという点に集中した。(13) しかしその後ペテロの告白自体の意味も論議の対象となり，「あなたこそキリストです」のキリストとは，政治的革命行動の指導者，すなわち政治的メシアを意味するという説も現れた。(14) ここではその議論に立ち入る余裕がないが，この場面の直後，マルコ福音書ではペテロとイ

エスとの間にイエスの死に方をめぐる激しい論争と対立があったことを記していることからも，問題は決して単純ではないことがわかる。もしも，ペテロの発言がマルコ福音書の読者にとって政治的意味を感じさせるとすれば，マタイはこれを否定しなければならない。おそらくこの推測は正しいであろう。しかし，仮にそうでないとしても，マタイはマルコ福音書の記事だけでは不満であった。マルコ福音書のみではエルサレム教会の掲げる弟子の権威は肯定されていないばかりか，前後を含めて読むと弟子の権威は失墜しているのである。そこで傍線部分の加筆が必要になる。

マルコ福音書の描く弟子，その筆頭と目されるペテロは全くイエスを理解していない。しかし，マタイ福音書によればペテロの発言は「生ける神の子キリスト」という部分を加えられて教会の根幹をなす重要な信仰告白文となる。そして，このペテロに地上と天上の教会の一切の権威が授けられるのである。言うまでもなく，このペテロに相当の地位を保証しているエルサレム教会は自動的にこの権威の保持者となる。

どのような背景と事情があったのかはすでに述べたとおりである。同様の意図による改作箇所を次にあげたい。

(2) 水の上を歩く

〈マルコ６：45〜52〉	〈マタイ14：22〜33〉
45それからすぐ，イエスは自分で群衆を解散させておられる間に，しいて弟子たちを舟に乗り込ませ向こう岸のベツサイダへ先におやりになった。26そして群衆に別れてから，祈るために山へ退かれた。27夕方になったとき，舟は海のまん中に出ており，イエスだけが陸地におられ	22それからすぐ，イエスは群衆を解散させておられる間にしいて弟子たちを舟に乗り込ませ，向こう岸に先におやりになった。23そして群衆を解散させてから，祈るためにひそかに山へ登られた。夕方になっても，ただひとりそこにおられた。24ところが舟は，もうすでに陸から数丁も離れており，逆風が吹いていたために波に悩まされていた。25イエスは夜明け

た。48ところが逆風が吹いていたために弟子たちがこぎ悩んでいるのをごらんになって，夜明けの4時ごろ，海の上を歩いて彼らに近づき，そのそばを通り過ぎようとされた。49彼らはイエスが海の上を歩いておられるのを見て，幽霊だと思い，大声で叫んだ。50みんなの者がそれを見て，おじ恐れたからである。しかし，イエスはすぐ彼らに声をかけ，「しっかりするのだ。わたしである。恐れることはない」と言われた。51そして，彼らの舟に乗り込まれると，風はやんだ。彼らは心の中で非常に驚いた。52先のパンのことを悟らずその心が鈍くなっていたからである。	の4時ごろ，海の上を歩いて彼らの方へ行かれた。26弟子たちは，イエスが海の上を歩いておられるのを見て，幽霊だと言っておじ惑い，恐怖のあまり叫び声をあげた。27しかし，イエスはすぐに彼らに声をかけて，「しっかりするのだ，わたしである。恐れることはない」と言われた。28するとペテロが答えて言った，「主よ，あなたでしたか。では，わたしに命じて，水の上を渡ってみもとに行かせてください」。29イエスは，「おいでなさい」と言われたので，ペテロは舟からおり，水の上を歩いてイエスのところへ行った。30しかし，風を見て恐ろしくなりそしておぼれかけたので，彼は叫んで，「主よ，お助けください」と言った。31イエスはすぐに手を伸ばし，彼をつかまえて言われた，「信仰の薄い者よ，なぜ疑ったのか」。32ふたりが舟に乗り込むと，風はやんでしまった。33舟の中にいた者たちはイエスを拝して，「ほんとうに，あなたは神の子です」と言った。

この物語は，現代人にとってはなぜイエスが水の上を歩けたか，あるいはこの行為を象徴的に解釈するとしてその意味はなにかという点に関心が集中するのだか，この物語の原型はごく素朴な民間説話として伝承されたものであろう。その民間説話自体の意図は現在の福音書の記録からは不明になっているとしか言いようがないが，マルコはこれをイエスに対する弟子の無理解を語る物語と

して伝えた。事情はともかく，逆風に悩む弟子を助けようとして水の上を歩いて行ったイエスを弟子たちはこともあろうに幽霊だと見て恐れるのである。その証拠にマルコは「パンの奇跡のこともわからない弟子だったのだよ」と，この物語を結ぶ。

マタイ福音書の意図は明白である。弟子たちは確かにイエスを見間違えて叫び声をあげるが，イエスだと分かるとペテロはイエスに近づくために水の上を歩く。ペテロは人間だからさすがに恐ろしくなって溺れかけるが，確実に彼はイエスに近づくためには水の上を歩いたと報告されている。そして，そのことが契機となって弟子たちがイエスを「礼拝する」という場面に導かれる。ここでもその礼拝は「あなたは神の子です」というエルサレム教会の信仰告白によって成り立っていて，マタイ福音書16章のペテロの告白場面の伏線となっている。このようにここでもマタイはマルコ福音書を改作し，加筆によってペテロ，すなわちエルサレム教会の宗教的権威を主張する。

(3) 復活物語

〈マルコ16：1～8〉	〈マタイ28：1～10〉
1さて，安息日が終ったので，マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとが，行ってイエスに塗るために，香料を買い求めた。2そして週の初めの日に，早朝，日の出のころ墓に行った。3そして，彼らは「だれが，わたしたちのために墓の入口から石をころがしてくれるのでしょうか」は話し合っていた。4ところが，目をあげて見ると，石はすでにころがしてあった。この石は非常に大きかった。5墓の中にはいると右	1さて，安息日が終って，週の初めの日の明け方に，マグダラのマリヤとほかのマリヤとが，墓を見にきた2すると，大きな地震が起こった。それは主の使いが天から下って，そこにきて石をわきへころがし，その上にすわったからである。3その姿はいなずまのように輝き，その衣は雪のように真白であった。4見張りをしていた人たちは，恐ろしさの余り震えあがって，死人のようになった。5この御使は女たちにむかって

手に真白な長い衣を着た若者がすわっているのを見て，非常に驚いた。6するとこの若者は言った，「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが，イエスはよみがえって，ここにはおられない。ごらんなさい，ここがお納めした場所である。7今から弟子たちとペテロとの所へ行って，こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて，あなたがたに言われたとおり，そこでお会いできるであろう，と」。8女たちはおののきながら，墓から出て逃げ去った そして，人には何も言わなかった。恐ろしかったからである。	言った，「恐れることはない。あなたがたが十字架におかかりになったイエスを捜していることは，わたしにわかっているが，6もうここにはおられない。さあ，イエスが納められていた場所をごらんなさい。7そして，急いで行って，弟子たちにこう伝えなさい，『イエスは死人の中からよみがえられた。見よ，あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。そこでお会いできるであろう』。あなたがたに，これだけ言っておく」8そこで女たちは恐れながらも大喜びで，急いで墓を立ち去り，弟子たちに知らせるために走って行った。9すると，イエスは彼らに出会って「平安あれ」と言われたので，彼らは近寄りイエスのみ足をいだいて拝した。10そのとき，イエスは彼らに言われた，「恐れることはない。行って兄弟たちに，ガリラヤに行け，そこでわたしに会えるであろう，と告げなさい」。

エルサレム教会はイエスが十字架の死後3日目に復活したという伝承を早くから信仰告白の中心的テーマとして掲げていた。パウロはコリント人への第1の手紙15章3～5節において，①イエスが罪のために死に，②葬られ，③3日目に甦り，④ケパ（ペテロ）に現れ，12人に現れたという復活伝承をエルサレ

ム教会から与えられたと言っている。マルコも当然そのことを知っている。しかし，マルコ福音書は，16章9節以下は後代の加筆であって元来は8節で終わっている。[15] 男の弟子たちはイエス逮捕の時点から逃亡したままである。女たちだけが空虚な墓を目撃し，復活の知らせを聞く。しかし，女たちはそのことを弟子たちには伝えない。また，イエスはその後も弟子たちには現れない。復活のイエスはエルサレムではなくガリラヤにいる。ガリラヤに行かなければイエスには会えない。これは，エルサレム教会が弟子，特にペテロの権威を自らの教会の権威の根拠としていることへの反論である。マタイはこれを書き改める。女たちは喜び勇んで弟子に伝えるために走って行く。その途中で彼らはイエスに会い，イエスを礼拝し，改めてイエス自身から弟子たちに伝えることを命じられる。これは，明らかにマルコ福音書の書き直しであり，マルコ福音書に対する挑戦である。

このようなマタイの手によるマルコ福音書の改作，修正はたくさん指摘することができる。その場合，上記の3例のようにマルコ福音書に加筆するという方法があるが，マルコ福音書の記事のある部分を削除するという方法もとられる。また，Q資料やM資料を用いて，あるいは自らの編集句を用いて，マタイが自己の立場を主張するという場合もある。延々と述べられるパリサイ派批判などはその例である。そこで，全てのテキストを分析する紙面の余裕がないので，その他の箇所についてはワン・ポイントの意見のみを記すこととする。

(4) マルコ福音書とマタイ福音書の比較（MT：マタイ，MK：マルコ）

マルコ	マタイ	両　者　の　相　違　点
1:1-8	3:1-12	MTはヨハネの説教の中にパリサイ批判を加筆
1:9-11	3:13-17	MTは神の子の受洗の疑問を解説する
1:12-13	4:1-11	MTは誘惑物語を紹介。MKでイエスは断食しない
1:14-15	4:12-17	MTはイエスのガリラヤ居住を予言成就とする
1:16-20	4:18-22	両者ほぼ同じ
	5:1-7:29	山上の説教。教団加入のための戒律

1:21-28		MTは削除
1:29-34	8:14-17	MTは癒しをイザヤ53章の成就として語る
1:35-39	4:23-25	MKは弟子批判。MTは一般的叙述
1:40-45	8:1-4	MKは宣伝を嫌う。MTはそんなためらいはない
	8:5-13	教会は選民イスラエルの真正な継承者である
	8:18-22	弟子は厳しい資格審査を通っている者である
2:1-12	9:1-8	MKは律法論争の愚かさを描く。MTは一般論
2:13-17	9:9-13	MKは罪人との連帯を描く。MTはその点を軽視
2:18-22	9:14-17	若干の加筆以外はほぼ同じ
2:23-28	12:1-8	MKは安息日は人間のためと主張
3:1-6	12:9-14	MKは安息日法否定。MTは緊急の場合のみとする
3:7-12	12:15-21	MKは民衆運動の拡大を報告。MTはイザヤ42引用
	9:27-34	信仰告白を救いの条件とする
3:13-19	9:35-10:4	MTは「12使徒」という表現を使う
3:20-30	12:22-37	MTは宗教的権威への反逆を断罪する言葉を加筆
	12:38-45	教会の権威と倫理の教説
3:31-35	12:46-50	MKはイエスの親族の無理解を語る
4:1-20	13:1-23	MKは弟子の無理解を語る
4:21-34		種のたとえを列挙
	13:24-52	たとえとその解釈例を列挙
4:35-41	8:23-29	MKはイエスの力を素朴に語る
5:1-20	8:28-34	MTは臨場感のない物語にまとめる
5:21-43	9:18-26	MTでは奇跡の現場に立ち合うのは弟子
6:1-6	13:53-58	MKはイエスの狼狽ぶりを伝える
6:7-13	10:5-15	MTは受け入れぬ者への審判，報復を宣言
	10:16-11:1	MTは弟子のことになると急に多弁になる
	11:2-30	MTは宣教論を展開

6:14-29	14:1-12	ヘロデの描き方に相違
6:30-44	14:13-21	MKではイエスの奇跡を弟子は信用していない
6:45-56	14:22-36	（前述）
7:1-23	15:1-20	MTではペテロを前面に出す。16章の伏線
7:24-30	15:21-28	MTはイスラエルのみを救いの対象とする
7:31-37	15:29-31	ここでもMTは奇跡物語の臨場感なし
8:1-10	15:32-39	いずれも5,000人のパンの話の焼直し
8:11-21	16:1-12	いずれもよくわからない話
8:22-26		MTはとにかく治癒の物語が嫌いだ
8:27-30	16:13-20	（前述）
8:31-9:1	16:21-28	従うのはMTでは弟子，MKでは人々
9:2-13	17:1-13	MTは弟子に按手し教会の指導者に任命する
9:14-29	17:14-21	MKでは弟子の無力を指摘。MTは断食を奨励
9:30-32	17:22-23	MKの弟子は無理解。MTの弟子はイエスに同情
	17:24-27	MTによればイエスは神殿に批判的ではない
9:33-37	18:1-5	MKは弟子の出世欲を批判。MTは不問
9:38-41		弟子の特権意識を批判
9:42-50	18:6-9	「小さい者」の意味がMKとMTでは相違
	18:10-35	教会の権威についてのたとえ話
10:1-12	19:3-12	MTは独身主義を導入
10:13-16	19:13-15	MKは子供を排除する弟子を批判
10:17-31	19:16-30	MTは12弟子が選民を継承すると主張
	20:1-16	MT独自の資料によるたとえ話
10:32-34	20:17-19	MKでは弟子はイエスの行動を理解しない
10:35-45	20:20-28	出世要求の責任はMTは母親，MKは弟子自身
10:46-52	20:29-34	MKは「ダビテの子」，MTは「主」を加える
11:1-11	12:1-11	MTはMKの群衆の言葉から政治的性格を削除

11:12-14		神殿批判の象徴行為としていちじくを枯らす
11:15-19	21:12-17	MTはイエスの神殿批判をやわらげる
11:20-26	21:18-22	MTではいちじくの行為の意味を変える
11:27-33	21:23-27	両者ほぼ同じ
	21:28-32	ヨハネを信じなかった人への批判のたとえ
12:1-12	21:33-46	MTはユダヤ人対異邦人の図式を持ち込む
	22:1-14	選民批判を教会加入資格審査の話に変える
12:13-17	22:15-22	両者ほぼ同じ
12:18-27	22:23-33	両者ほぼ同じ
12:28-34	22:34-40	MTはイエスと律法学者の共感を削除
12:35-37	22:41-46	MTはパリサイとの対立点を強調
12:38-40	23:1-39	MTは膨大な字数でパリサイ批判の演説をする
12:41-44		貧しい人々に向けるイエスの目を伝える物語
13:1-4	24:1-3	MTは弟子の無理解を弁明する
13:5-13	24:4-14	MTは世界宣教というテーマを持ち込む
13:14-23	24:15-28	MTは神殿崩壊予言を終末論として扱う
13:24-27	24:29-31	MTは再臨の際の他民族支配を肯定的に描く
13:28-33	24:32-44	MTはノアの話を用いて再臨を論ず
13:34-37	24:45-51	MTは審判者の厳罰を主張
	25:1-46	MT独自の審判者の厳罰を語る３つのたとえ話
14:1-2	26:1-5	MTは３回目の受難予告とする
14:3-9	26:6-13	MTでは弟子は慈善行為をする者となる
14:10-11	26:14-16	MTはユダの得た金額も記録し彼の犯罪性を強調
14:12-31	26:17-35	MKは弟子全ての裏切りの可能性を主張
14:32-42	26:36-46	MKは死を恐れるイエスを描く
14:43-52	26:47-56	MTは天使の軍団も意のままになると言う
14:53-72	26:57-75	MTは神殿崩壊証言を否定していない

	27:1-10	ユダの自殺を報告。裏切り者は抹殺する
15:1-20	27:11-31	MTはピラトを弁解しユダヤ教の責任とする
15:21-32	27:32-44	両者ほぼ同じ
15:33-41	27:45-56	MTは地震と死者の復活を報告
15:42-47	27:57-61	両者ほぼ同じ
	27:62-66	MTのみ墓の番人を登場させる
16:1-8	28:1-10	（前述）
	28:11-20	復活のイエスが世界宣教を弟子に委ねる

結び．今後の課題

共観福音書研究は，現在の福音書の成立過程を解明することを目的として始まったが，その結果として各福音書編集者のイエス理解，神学，特に教会論，宣教論，そして歴史観などがそれぞれ特色ある形で明確になってきた。しかも，マルコとマタイのように，福音書の背景には対立と論争があるということも明らかにされた。本稿では扱っていないが，マルコとルカの間にも同様の論争の跡を検証することが可能であろう。(16) また，文献の比較としては困難だろうが，マルコとパウロについても両者を比較しなければならない。ヨハネ福音書やヨハネの黙示録も比較のテーブルに載せる必要がある。(17) そこでは当然，新約聖書の多様性が顕著になるであろう。

それでは，このような研究はいかなる到達点に向うのだろうか。現在までにも新約聖書の多様性を指摘する研究はなされてきた。しかしながら，そこに指摘される多様性は，既存のキリスト教という枠の中での多様性として描かれ，その多様性はいわゆるケリュグマ（教会の信仰告白定式，または教会の宣教の中心的内容）神学の幅の広さを示すものとして扱われるか，あるいは，ケリュグマによっていかに聖書のすべてが統一されるかを論証するために指摘される多様性であった。(18) そこでは確かに多様性が指摘される。しかし，すぐさま

統一性が主張される。ケリュグマ自体は常に絶対のものとされるのである。だが，我々が見出そうとする多様性はケリュグマにのみこまれてしまうようなものではない。少なくともマルコは，このケリュグマの枠組みには入らない。むしろ，この枠組みそれ自体に批判的であり，イエスをそのケリュグマの枠内で語ることに対して決定的な拒否の姿勢を示し，自分たちの出会ったイエスを民衆の生きた語り方で語り，イエスの運動を生き生きと展開，継承することこそが大切だと主張するし，そのためにマルコは遠慮なくエルサレム教会の組織絶対主義，弟子の名を借りた権威主義，および独善的世界支配とその排外主義を批判するのである。

そこで，そのような考えに立つと新約聖書をどのように読み，語ったらよいのか，という問も出されるであろう。躊躇する必要はない。我々はさまざまな立場からの「イエス証言」を新約聖書の中に与えられている。それぞれの証言の背景をふまえ，その主張の意義を探り，現在のキリスト教，人間社会，自分自身，そしてこれらの将来を誠実に，できる限り正確にとらえつつ聖書の研究を実行すればよい。その際に，新約聖書の中に展開される論争のどの立場に共鳴するかは，その誠実さと正確さによって決定されるだろう。そして，このような，時には厳しい自己批判を含む新約聖書の読み直しこそが，新しい新約聖書の魅力と，新しいキリスト教の将来を示す手がかりを作るにちがいないと考えるのである。(19)

今こそ，民衆の立場に立つイエス理解と，それを実践的に追求する民衆の共同体が必要である。

註

(1) マルコ661節，マタイ1068節，ルカ1149節の内，マタイもルカも使用しなかったマルコは31節，マタイが使用したマルコは610節，ルカのみが使用したマルコは20節である。

(2) William Barclay : The Mind of Jesus, 1960. Crucified and Crowned,

1961. Ethelbelt Stauffer : Die Botschaft Jesu, 1959. Jesus-Gestalt und Geschichite, 1957. A.M.Hunter:THE Work and Words of Jesus, 1950. などはこの類いであり，こぞって邦訳されたので日本の教会ではこの方法論がかなり浸透してしまった。

(3) 歴史性とは単なる史実性でない。ある人物の歴史とは，常に，その人物及びその人物と関わりのあった者との間に生起したできごとを言うのであって，そのできごとは関わる者たちの実存において記録される。我々はその記録を，今日の状況をふまえつつ自らの実存において受け止める。その作業全体が歴史である。

(4) 口伝を未発達の，従ってあまり重要視する価値のない段階のものと見てはならない。ここにこそ生き生きとしたイエス伝承があったはずである。我々ももう一度聖書をより正しく読みつつ，この時代の口伝を形成すべきである。

(5) 安炳茂氏は〝イエスは民衆（ミンジュン）である〟「民衆神学Ⅱ」においてマルコ成立を70年以降とする理由として，「マルコ・グループ」が次のような課題をもっていたと言う。①神殿崩壊後のユダヤ教の伝統をどうするのか。②故郷を失い散らされた人々をどうするのか。③教権論争，たそえばパウロが「私が伝えたこの福音以外のことを伝える者はのろわれよ」と言っているが（ガラテヤ1:8,9），このようなことをどうするのか。これと関連して使徒職の問題はどうするのか。④苦難に直面する民衆にイエスの十字架をどう説明するのか。⑤イエスの復活と共に神の国は実現しなかったが，このことをどう説明するのか。

(6) パウロによれば罪とは人間が生れ乍らにしてもっている消すことのできない神に反逆する悪しき性質であるが，イエスはそのような意味で罪という言葉を使ったかどうか，特にマルコの伝承における罪の意味を明らかにしなければならない。神の国，神の子も同様である。マルコを扱う時には，これらの言葉をケリュグマの外で考えてみなければならないし，そのことは今日大きな意味をもつ。

(7) イエスの時代を，のどかな花咲く春として想像するのは間違いであって，

古くはバビロン時代から，特にヘロデ政権誕生のころから，民衆にとっては苦難と屈辱の時代であった。イエスの生きた時代にはすでに反ローマ行動が頻発し，多数の犠牲者が出ていたし，70年のエルサレム崩壊に向って突き進んでいた時代である。このことをふまえないと新約聖書理解が決定的にゆがんでしまう。

(8) イエスの運動とクムラン教団を直接的に結ぶ証拠はないが，同じ時代の宗教的，思想的運動として何らかの関係を探る必要がある。

(9) 1:22-23, 2:23, 4:14-17, 8:17, 12:17-21, 13:14-15, 13:35, 21:4-5など。

(10) マタイ5:20

(11) コリント人への第1の手紙15:3-7

(12) コリント人への第2の手紙5:16

(13) カトリック教会が教会の土台はペテロ自身でありローマ教皇は彼の伝統を継ぐと主張するのに対して，宗教改革者は教会の土台はペテロの信仰告白であると主張した。この論争の背景にはローマ教皇権の問題がある。

(14) Oscar Cullman, Petrus, 1960.

(15) マルコ16:9以下はマルコの復活の記事がないのは都合が悪いと思った後代の人の加筆であり，マタイ，ルカなどから寄せ集めた報告にすぎない。

(16) ルカはマタイほどにユダヤ教への対抗意識は示さないが，教会がイスラエルの歴史を継承するという論法は確立している。むしろマタイよりも論理的である。

(17) Oscar Cullman : Urchristentum und Gottesdienst, 1950. によれば，ヨハネ福音書は教会の礼典の根拠を語ることを主たる目的としているとされる。また，従来ヨハネ福音書にはイエスの史実性は乏しく，哲学的な作品であると言われていた。しかし，最近になってヨハネ福音書の中に共観福音書が持っていなかったイエス伝承があるということが指摘されている。

(18) H. H. Rowley : Unity of The Bible, 1961.

(19) 宋泉盛（ソン・チョアンシェン）「民話の神学」，徐南同(ソ・ナムドン)「民衆神学の探求」など，従来の西欧的，ユダヤ・キリスト教の救済史観に

立つ神学と聖書解釈ではなく，民衆の立場による神学と聖書解釈を提唱する研究が発表されている。今，新しい時代が聖書の世界にも訪れようとしている。